

芦別農業の後継者として期待

「地域おこし協力隊」 本年度1人採用

総務省は、人口減少や高齢化などの進行が著しい地方に、都市部の若者らが移住し、地域社会の新たな担い手となることを目的とした「地域おこし協力隊」事業を推進しています。

市では、この制度を活用し、今年7月に1人を採用。市内の農業生産法人で従事しています。

今月は、「地域おこし協力隊員」の松田佑太さんを紹介します。



稲刈り最盛期。コンバインで収穫した籾を乾燥所へ運ぶため何度も往復。旭栄農園の山本英幸さん(左)は、「失敗もやらかしたけど、仕事の覚えが早くて、何事にも積極的。期待できますよ」と太鼓判を押す。

将来は、良質な芦別の農作物を生かしたお店も

今年7月から芦別市に「地域おこし協力隊員」として採用され、旭町の旭栄農園で働いているのは、松田佑太さん。札幌市出身の30歳、独身です。

これまで、札幌市内でラーメン店の店長を務めるなど、飲食関係の仕事に就いていましたが、市のホームページで「地域おこし協力隊募集」の記事を見て、「芦別のことはよく知らなかったけど、新天地で頑張ってみよう」と、応募したそうです。

「飲食業の仕事でさまざまな食材を目にしているうちに、農業への興味が出てきました。働き始めてまだ2か月ですが、農作物を育てるに

「地域おこし協力隊」とは

総務省が、過疎化が進む地方自治体の地域力維持・強化を図るために行っている事業で、2009年度(平成21年度)にスタート。現在、全国の自治体で600人以上が採用され、各地の実情に合わせてさまざまな仕事に従事しています。

隊員の任期は1年ごとに更新し、最長3年。自治体には、国の財政支援として隊員の報酬と活動費が交付されます。

本市では、農作業の従事を通じて農業経営の研修を積み、隊員の任期終了後も農業後継者として本市に定住してもらうことを図るため、この制度を活用しました。

農業経営者を目指し 札幌市から移住した 松田佑太さん(30)



は、天候の見極めや土づくりのほか、ビニールハウスを建てたり、修繕したり、いろいろなことをしなければなりません。農業は奥が深いなあと感じました」と松田さん。

今は仕事を覚えるのに精一杯といたところですが、農業まつりの手伝いや芦別小学校の児童と交流も持つなど、さまざまな人たちとの出会いが癒しとなっているそうです。

「農業経営者として一日も早く独立できることを目指して、将来は飲食業の経験をもとに、品質の良い芦別の農産物を生かしたお店も開きたいですね」と、芦別での夢を膨らませています。